

分断癒やす天使の試み



秋山 信一

「長年の友人と疎遠になった」
「家族の仲がぎくしゃくした」。
2021年春に米国に赴任して
から、取材中によく聞く言葉だ。

原因は政治。トランプ前大統領を支持するかどうかを巡って意見が対立すると、互いに「言っても分かってくれない」と不信感が高まって、付き合いが薄れる。「理解してくれる」と思う人ばかりと交流するようになり、意見が合わない人とは余計に疎遠になる。そして、溝が深まる。トランプ氏を支持する人も、批判する人も、悲しい顔で語る。でも、どうやって溝を埋めていけばいいのか分からない――。

そんな苦悩を癒やそうと活動しているのが、非常利団体「ブレイバー・エンゼルス（より勇気のある天使たち）」だ。今年7月に東部ペンシルベニア州ゲティズバーグで開かれた年次総会には、全米各地から党派を超えて約700人が集まった。社会の分断が個人的な人間関係に影響を及ぼした経験談を共有し、「それでも自由に語り合うことが重要だ」との思いを訴えた。4日間の総会中、人種、メディア、

宗教など、さまざまな観点から「分断」の現状と「癒やし」の道を探るイベントが開かれた。

3日目の午後、「私たちはトランプ氏を再び大統領に選ぶべきか」をテーマにした集会をのぞいた。数十人が車座になり、賛成、反対の立場から交互に意見を述べていく。質問時間も設けられたが、感情的になるのを防ぐための工夫がこらされた。発言者に直接「なぜ、あなたはそう考えるのか？」と問うのは禁止で、代わりに議長に「なぜ、彼／彼女はそう考えるのでしょうか」と尋ねる。すると、議長が発言者に「なぜですか」と答えを促す仕組みだ。直接質疑する迫力には欠けるが、ヒートアップせず冷静な議論につながる狙いがあった。「トランプ氏の目的は個人的な利得だ」「人柄はともかく、政策は評価できる」。1時間超にわたって、和やかな中にも率直な議論が展開された。

互いに耳を傾けることが癒やしにつながるのか。トランプ氏の支持者は「(トランプ派が多い)田舎の人間が、都会の人間にどう思われているのかよく分かったよ」と語った。「どうせ、自分の気持ちは理解されない」という悔しさがにじんでいた。「癒やし」の道の険しさを思った。